

## (続) 歴史および歴史学について

天理大学人文学部教授

松原 浩一郎 Koichiro Matsubara

歴史学は、歴史的叙述から分離して、史料批判にもとづき過去の事実を明らかにする実証主義によって、客観性を担保した。いわゆる近代的歴史学はランケによって確立した。ランケ学派は、公文書などの資料を研究対象として、「それ」が実際にはいかなるものだったのかということを明らかにすることが歴史学なのだと主張したのである。これに対して「それ」を選択するのは歴史学者の「問題関心」なのだと主張したのが、アナル学派であった。とりわけ近現代になると大量の資料が存在する。資料を見ていても、資料は何も語ることはない。したがって歴史学は「問題史」、つまり資料の観察ではなく、解釈をする学問領域なのだと言われ、アナル学派は主張する。そして、従来の「政治史」中心の歴史学に、「社会史」研究の道を開いた。

アナル学派は、フランスの大学教授によって始められた研究手法を嚆矢としたのに対して、イギリスにおいても新たな学派が誕生する。それが「労働史学」である。

第2次世界大戦中の1942年、イギリスは戦後の国家ビジョンを描いた。それがベヴァリッジを委員長としてまとめられた報告書『社会保険および関連サービス (Social Insurance and Allied Services)』である。「ゆりかごから墓場まで」というキャッチフレーズがこの報告書の内容を言いあらわしている。乳児から高齢者まで、すべての国民の安定した生活を国家が保障する仕組みを作り上げることを目指したのである。こうして戦後のイギリスは、社会保険（年金保険、医療保険、失業保険など）を基盤にして、公的扶助や各種手当などの制度を包括的に構築して、いわゆる福祉国家を形成していったのである。

社会福祉学にとって、ベヴァリッジ報告および福祉国家論（体制）は、きわめて重要な研究対象となってきたことは言うまでもない。しかし福祉国家論は、社会福祉学ばかりではなく、歴史学にも大きな影響をおよぼした。歴史学者は、福祉国家の担い手であつ対象者である人々がいかなる階層の人々なのか、いかにして生まれたのか、どんな性格をもっているのかに注目した。そして、それらの人々がいかにして政治や経済あるいは社会のアクターになるのかに関心を抱いたのである。これらの人々は、戦争中多くの財産を失い、あるいは家族に死傷者を生み、戦後は資本主義経済の発展に欠かせない「賃金労働者」になっていく。つまり人々の研究とは、労働者への関心ともいえる。こうしてイギリスにおいて「労働史学」が生まれたのである。

労働史学の特徴は、労働組合などの組織史や、ストライキなどの労働者集団の歴史だけではなく、労働者個人の領域にまで研究対象を拡大した点である。ランケ学派は、資料至上主義を唱え、公的資料を最も重要な分析対象として、個人の「記憶」を排除する。なぜならば、個人の「記憶」は、その事実を検証することがきわめて難しく、あいまいさがつきまとうからである。ところが「労働史学」は、労働者の「記憶」を研究対象に組み入れた。具体的には労働者の手紙や日記、嗜好にいたるまで分析対象にした。また、公的資料とはいえない労働組合の記録等も用いた。ランケ学派が研究対象にしなかった「私文章」に焦点をあてたのである。

筆者は、天理教北海道教区が創設した知的障害児施設「富ヶ

岡学園」(1949年)に関する研究を行ったことがある。研究対象としたのは『富ヶ岡学園建設日誌』(以下、日誌)である。詳細はこの連載でのちに取り上げる予定だが、研究のきっかけは、廃棄寸前の日誌の発見と入手だった。この日誌には、建設に関するさまざまな内容が記録されている。しかし公表することを前提として書いたのではなく、備忘録として書き留めたものだったと思われる。いわば「私的文章」と言える。この他にも、筆者はこれまで教内の多くの福祉実践者にインタビューを試みてきた。これも「記憶」の表出なのである。ここでも、教内の福祉史を語るときに欠かすことができない貴重な内容を収集することができた。これについても、今後の連載で取り上げる予定である。

最後に歴史学に大きな衝撃を与えた「言語論的転回」について述べたい。この基本的な発想は、20世紀初め、スイスの言語学者フェルディン・ド・ソシュール(1857～1913)によって体系化された。ソシュールは、「言語は、世界を写すのではなく、構築する」と主張した。その後1960年代に哲学の領域でもちいられ、歴史学をはじめ多くの学問領域に広まっていった。この考え方の特徴は、①「モノとそれをあらわす言葉の関係は恣意的だ」ということである。たとえば、いぬという言葉聞いて、イメージする犬は、他の人と一致するとは限らないということである。そしてさらにモノに対する言葉の優位性を主張する。つまり「はじめにモノがあり、そののちそれに合う言葉が決められた」と考えずに、②「はじめに言葉が存在した。そののち、それに対応するモノが決められた」というのである。これを、先の労働史学を例にして考えるどうなるのか。産業革命により、工場で働いて賃金を得る労働者という「階級(class)」が成立し、彼らが団結して労働組合を結成して資本家に対峙して、待遇改善をはかった、という通説が否定されることになる。つまり「まず労働者階級という言葉ができて、この言葉が広がり労働者が一つの集まり(階級)とみなされるようになり、あるいは自分たちを階級とみなすようになり、実体としての労働者階級ができた」ということになるのである。このように言語が実体を構築するのである。

言語論的転回は、歴史学には衝撃的な学問的潮流であったが、宗教的には親和性のある理論なのである。

天理教教祖の「ひながた」を、この理論を用いたらどうなるのか。まず「ひながた」という言葉があり、それに教祖の実跡の一部を結びつけて「ひながた」を形作ったということになる。「ひながた」は一般名詞でありつつ、教内では独自の意味をなす。とりわけ「50年のひながた」は、教内でのみ通用する言葉である。おさしづで示された「ひながた」という言語が教内に普及する過程で、教祖の実跡の一部をこれにあてはめていったのである。とりわけ『稿本天理教教祖伝』や『稿本天理教教祖伝逸話篇』においては、「ひながた」という言語が、教祖の実跡の一部を構築していったともいえるのである。

今回は、この点を今一度検討したい。

[参考文献]

小田中直樹(2022)『歴史学のトリセツ』ちくまプリマー新書。